



西澤健追悼特集

在りし日の西澤健を偲び、その創作世界を辿る
道具を原点にして拡がる、装置・環境・都市の姿を探る



Memorial Message

朴訥な野人、西澤健

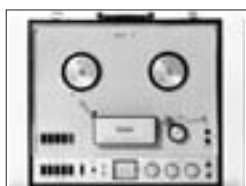
栄久庵 憲司



Column

「お揃いの美」から
「まだらの美・
まだらの日本」へ

西澤 健



Project Report

道具からの出発



Project Report

拡がる環境、限りなき挑戦



Project Report

「装置環境」の展開



Project Report

博覧会プロジェクトが
もたらしたもの



Project Report

道具から建築
そして都市環境へ



People & Activity

西澤健の足跡

ほくとつ
朴訥な野人、西澤健

西澤健追悼特集

栄久庵 憲司 (GK デザイングループ代表)

人は死んで初めて価値がわかるものだ。価値にも高い価値、低い価値と様々あるが、西澤健は信頼のおける男としての価値は高い。あつて七癖とって人間には必ずどこか欠点があるものだ。だがその欠点は人物の性格を表現することによって、それぞれの個性の様なものを感じさせるのである。西澤健の場合は七癖どころかその何倍もの癖があった。人間として弱い部分も当然として癖に含まれているが、彼はよくそのことを知っていた。欠点は生のままで人にさらすと醜いものだが、欠点を充分に知って欠点を人にさらした場合は可愛らしさすら感ずることがある。西澤健にはそれがあつた。自分の欠点を心得ているのであつて、人柄としては寧ろ価値は高い。西澤健の体内には欠点すら人に愛される自動センサーがあつたようだ。それは彼の感性だ。

父君は法曹界で名の知られた風雅な人であつたと聞く。風雅の基本は人に迷惑をかけることである。人に迷惑をかける風雅は気狂いといつても言いすぎではない。西澤健は、幼い頃から風雅な環境で育つたのか、茶道をはじめ、父親の薫陶を得てか、日本の伝統文化の気分をよく心得ていた。目立つことをとみに嫌つた。照れ屋だつたのだろう。照れ屋は決して人に不快感を与えない。グループのリーダーとして時には目立つてもらいたいことがあつた。組織活動に必要な能力というものを経た訓練で必ず獲得できるものだ。苦手でもそのうち

自分のものにしようと思つていたが、なかなか私のイメージ通りにはならなかつた。結果的には彼の葬儀の参列者の千人をはるかに越える多数の方々がその証しとなつた。彼は彼なりのひたむきなアピールの仕方では生きていたのである。

GKは目立とうとして目立つたのではなく地味な活動の結果、社会から認められてきた。GKの人格形成は今様ではないが、未来の人格形成が根底を流れている。67歳の西澤健の存在はそういう存在だつた。

西澤健は決して器用な人間ではなかつたが、大袈裟に言えば天地の動きに敏感で本能的に感じていた様な気がする。彼は、デザインは農民の米作りの様な世界だとよく言つていた。農民は名もない存在だが、その必要性は米作りとしては民族存亡の要になっている。目的はただひとつ、米を作ることだ。そのためには米作りに不必要なことを一切排除せねばならない。勇気が要る。努力が要る。人間が生きるためには、最も大事なことに心を傾けることこそ第一義である。稲を守るには農民は命をかけた。目立つどころではない。デザインを進める西澤健の生き方はまさにそういうところがあつた。禁欲性の強い理性的な人間だつた。風雅を好む家庭で育つたと言つたが、勿論彼はそこで涵養された感性を身に付けていたことは確かであり、今時古風な人柄を感じさせるところが多かつた。

風雅とは天地の間の調和を求めて生きる生き方である。従って、日本の風雅はすべてが日本人の自然観のもとで築かれたと断言していい。先に彼は農民のごとしと言ったが、農民が自然と完全なまでに心がかよったとき、米作りが成功すると言っていた。大事なことはかわることが何であるかを知るためには、常に感性を磨いて感度を高くする必要があった。自然は複雑である。天変地異は思いがけないときにやってくる。だからそれも事前に察知する必要がある。デザインも全く同じであり、人間と自然と地球との関係の中から、最もよい関係を築かねばならない。しかも人間にとって生きる希望と精神的面白みを築くことを必要としている。更にはデザインで社会生活や人間生活が飽きないようにさせねばならない。

西澤健は農民の様に目立たない地味な存在だったが、彼の夢は壮大だった。幸運にも彼は、日本のデザインの黎明期にデザイン世界に自らをかけてデザイナーになったのだ。未知の世界によくぞ飛び込んできたものだ。芸大出身の彼が芸大の歴史の中でもっとも未知な分野に身を投じたのは、人々を悦ばせる世界がデザインの世界と思ったからであろう。既に芸大では美術上の実績があり、基礎の確立した分野が多々ある中で、デザインを選んだのは未知という新しさに魅力を感じたのであろう。しかもデザインで人が楽しんでくれればそれを可とする人生を選んだのである。彼はGKという組織人であり、

朴訥な性格はリーダーとして常に部下への配慮の眼を離さなかった。同じ道を選んだ後輩をいとおしく思っていたのである。後輩は我儘だが、道と同じくする者の中に自分を見出していたのであろう。芸術家の一生はよく語られるが、それをデザイナーとしての自分の一生と比較してもあまり参考にならない。農民の米作りの様なデザインの世界に身を投じた西澤健のどこかに農民と西澤健との共通面が発見でき、一挙一投足に親しみが持てたものだった。また、デザイナーとして農民のごとく社会全般を生きなくてはならなかった。

彼は社会人として極めて均整の取れたデザイナーだった。均整のとれた人とは、私に言わせれば側にいて不愉快でない人をいう。決してへつらう人ではない。花は美しい。でも決してへつらいがない。自然は美しい。でも決してへつらいがない。どんなに海が荒れてもその時は憎いと思うが、私は海は好きだ。彼の人間性はそのようなものだった。

彼の生涯は素朴で、荒削りだったが、肌はしっとりとしてよりかかるとなるような人だった。私は彼より多少年上だがデザインの体験は全くといって同じと断言していい。GK創立50周年記念で同じ壇に上った時、私は彼の人となりの重さを感じた。デザイン道の先を歩いている頼りになる西澤健の背を見た。

弔辞

西澤健追悼特集

菊竹 清訓 (建築家)

謹んで、GKデザイン機構 代表取締役社長
西澤健さんの御霊前に申し上げます。

去る9月10日の訃報に接し、IDのリーダーとして活躍された40年来の友を失ったことは、深い悲しみであると同時に、GKのために、そして日本のID界にとって痛恨の極みです。

西澤さんは、GK代表の栄久庵さんのもとで、デザインについて、一緒に議論をし、デザインについて互いに励まし合い、ともに喜んできた仲間でした。1960年の世界デザイン会議の折りには、メタボリズムの発足で、川添先生を中心に、IDの飛躍的成果の基礎をつくられました。

哲学的思想の栄久庵さんのもとに、GK軍団の素晴らしいデザインの展開は、西澤さんの御盡力があってのことでした。栄久庵さんの「デザインの事業化構想」は、これを支える西澤さんのような人材なくしては実現が難しかったと思います。IDは、自動車や鉄道からカメラ、オーディオ、住宅カプセル、ショッピング、グラフィックデザインと裾野はひろがり、のちに西澤さんは、「ストリート・ファニチュア」について、著書をまとめられておりますが、これを見ると教育者としての素養と能力が、うかがわれます。慶応大、東京大、そして母校の芸大大学

院に招かれて後輩の指導にあられたのもよくわかります。

日本のIDを、都市計画、ランドスケープ、建築そして環境まで広く問題とするには、実に多様な多面的デザインの能力が求められますが、西澤さんには、得難い人間的魅力があつて、コラボレーションを見事に達成しておられ、そこに黙々としてデザインを追求して止まない求道者ともいえる風格がありました。インダストリーを基盤とするIDは、建築より一步進んだ近代合理性があり、また美的文化を伝承するという面で、ドイツのウルム造形大学に学ばれたことが、ID発展への偉大な貢献につながっていると思います。

戦後の日本の産業構造が世界一の発展をとげた、この50年、みのり豊かな時代をGKとともに、日本のIDを世界に発信してこられた西澤さんは、もって瞑すべきで、天井から日本のIDのこれからを、見守って頂くことでしょう。

ここに西澤さんのこれまでの健闘をたたえ、ひたすら魂の平安をお祈りし、弔辞といたします。

(平成15年9月14日、護国寺・桂昌殿にて執り行われた西澤健の葬儀における、菊竹清訓氏の弔辞を載録)



在りし日の西澤健



環境デザインの開拓者、西澤健さんを偲ぶ

西澤健追悼特集

川上 元美 (デザイナー)

GKデザイングループの代表として、早くから、屋外環境の「質」に目が向けられる時代の到来を察知して、道具レベルから環境装置のデザインに取り組み、ストリートファニチャーを体系化して見せ、また芸大の先輩として「環の会」の先導を果たしてきた西澤健さんが、逝ってはや一年が経つ。

西澤さんは、今日的課題をパースペクティブに眺め、新しい「環境デザイン」というフィールドから、開拓者として実践を重ねてきた先覚であった。土木や建築や造園と連なりながら、ややもすれば、技術本意になりがちなところを、解決に繋がる新しい視点を提示し、ものや環境そのものの「美」の優位性を声高に唱え、「デザイン」の本質を詠い続けたあの声も聞けなくなっ

て久しい。

近年は、西欧の整然とした様式美から、八百万の神がおわす我が風土には、『お揃いの美』よりも『まだらの美 まだらの日本』がふさわしく、この方が素敵である、『一つ一つがばらばらであっても、ある価値観の中で一つに集められた時、それが美しい一個になっている』と、あたかも曼陀羅の世界観のなかで美の境地に至り、日本の環境形成の目指す方向を示された。我々は大変共感し、かつ刺激を受けたものである。その指標がなくなりポツカリと身邊に穴があいてしまい、少し後退しているようにもみえる中、今一度、我々は氏の開いたみちを辿り、走破して行かねばならない。

心より冥福をお祈りいたします。

問題意識を共有した親しき仲間へ

曾根 幸一 (都市デザイナー)

西澤さんは工芸科、私は建築科で同級生だったのを知ったのは実は卒業後のことです。でもその後すぐ大阪の万博の仕事で一緒して以来、彼とは環境というキーワードの上で問題意識を共有する40年の長きにわたる仲間でした。GKという組織の中で彼はインダストリアルデザインから環境や景観の道筋を実務として定着させた最初の人だったかもしれません。隙間稼業と言えますがこの稼業も私たちのささやかな活動の積み上げで次第に社会性を帯びてきています。今晚はデザイン会議つまりJUDIの例会がありました。この会の発足時には年齢制限があって私や西澤さんが最年長組だったように記憶しています。私は何かと雑用にかまけてさぼっていますが、この会も立派に育って若い世代が

頑張っています。土田さんや南條さんや加藤さんに混じって必ず顔を出していた親分の一人が欠けてしまったこともあって今日は私が代役のつもりで出ましたが寂しい限りです。西澤さんは大工の親方のような益荒男型の風貌でしたが、そこからは想像もつかない優しさと実直さのあふれる人柄をお持ちでした。「首筋がおかしくて肩が回らないのだよ」そう言って私たちのへぼゴルフに参加出来なくなったのが数年前、「いや今日は一緒に帰ろうよ」と近所同士の家に車で送ってくれた時の雑談が最後になってしまいました。貴方のあだ名の「ケテル」の由来も本人から聞きそびれてしまった。安らかにお休み下さい。

「お早う、西澤さん」

曾根 眞佐子（文化女子大学教授）

西新宿界限は西澤パブリックデザインの宝庫。とりわけ西口から都庁に通じるビルの谷間の交差点を覆う巨大なサインリングは圧巻だ。通勤の道すがら毎日くぐり抜けるこのリングは私にとって学校へのゲート。一瞬、気を引き締める道しるべだ。通るたび、都会のど真ん中に大胆な発想と造形をもって、パブリックデザインの美と力を実現させた西澤さんの執念に感服する。

学生時代の西澤さんは真面目そのもの。いつも率先して課題を提出した優等生。クラス仲間のたわむれを脇からニコニコと見守りながら。自身は寡黙にコツコツと目ざす世界にとり組み、一目置かれる存在だった。

その世界の顕現が卒業制作。1959年当時、仲間の誰もが時代の花形テーマ、家庭機器や

生産機器、バイクのデザインに取り組んだなか、「郵便ポストのシステムデザイン」を提案。新領域の環境のデザインに挑戦した驚きを鮮やかに思い出す。

以来、西澤さんはパブリックデザイン一筋。誠実に着実にその道をきり拓き、たくさんの果実をみのらせ、そして逝ってしまった。

セーラー服時代の画塾帰りに玉電の中で声をかけられた最初の出会ってから50年。双方の父親が同じ信州人という親しみもあってか、バカをいったり悩みをぶつけあったりしたかけがえない歳月を共有した友はもういない。でも、毎朝サインリングをくぐり抜けるたびに「お早う」と声をかける楽しみを西澤さんは残してくれた。

西澤さんとの思い出

南條 道昌（株都市計画設計研究所会長）

私と西澤さんの結びつきは、沖縄海洋博の時間が一番深かったように思う。何となく現場というものに素人であった私に、現場での留意点、実現する時の留意点のようなものを一から教えて頂いたような気がする。幸い私どもの事務所（目白時代）とGKさんの事務所が比較的近かったこともあって、会場計画を担当した私が、ストリートファニチュアの設計をGKさんをお願いしたことはじまって、本土とは異なる強い光線量のもとでの色の見え方や、木材の変色、劣化の進み方などを、ファニチュアに使用するロック・ウッド（ベンチ用）やサインの表示に使うインクなどを用いて一年前くらいに、事務所の庭で実験することを奨めて下さった。また、アンカーボルトを打たずに、取り付け台の

重量だけで40m²の風荷重にも耐えられるサインボードの設計も協議の上決めることができた。その中で、いわゆるハブに注意のハブマークをデザインすることもできた。その年のサイン・デザイン年鑑の銀賞をかちとれたのも西澤さんの奔走のお陰だったのだろうと思っている。

暑い陽差しの中で、汗だくになりながら、実地的な意見を言われる西澤さんのやさしいが断固とした説得力あることばに深くうなずいていられたのは、ある意味で本当に幸せなことだった。私と違って良く気の廻られる西澤さんの資質は、都市環境デザイン会議などの団体の運営に不可欠のものであったと思うし、目白の会議室で食べて頂いた私の作ったカレーやソーメンがせめてもの慰めになっている。

ケテルの3分刈り

野口 瑠璃 (GK デザイン機構副会長)

戦後の銀座にいち早く開店していた本格的ドイツ料理のレストラン『ケテルス』があった。私たち学生身分では財布の中が心配だったが、それでも背伸びしてフランクフルトソーセージやアイスバイン、ザワークラウトの味を確かめに押しかけたものだ。

その『ケテルス』のショウウィンドウに並んだ名物チョコレート針ねずみが、剛髪をなびかせる西澤健の頭にそっくりで、たちまち彼のニックネームになった。それを気にしたのか、以来彼は髪を短い3分刈りにして終生を通した。

私が目白のGKに通い出したのは昭和31年大学3年も終わりに近づく春先であった。その翌年、栄久庵会長が米国留学から帰国して急に仕事が増え、まだ在学中の私に後輩から優秀人材をスカウトしてこいと先輩指示で、まず推薦した一人が伝説の天才であり典型的な都会型の故吉岡佑、続いて同期の信州育ち篤実努力型の西澤健である。曲面造型に力量を見せた吉岡、直線と比率にこだわる西澤、およそ対照的な二人であった。そんな二人が極秘裏に取り組んだヤマハ4輪乗用車2案は試作に終わったが、後のポルシェやシトロエンとみまごう、それぞれに優れた幻の名デザインであった。

その頃のこと、時は真夏の夕暮れの若者であふれる新宿歌舞伎町。プレスリー映画を見に出かけた私たちの目の前で頭は3分刈り、木綿のシャツとスラックス、スニーカーまで真白な若者がYAMAHA YD-1 (250cc) にまたがりエンジン音高く突然現れたと思ったら、いきなり車体を斜めにしてキレのよい逆ハンドルで停止した。まるで裕次郎映画のシーンといったところ。周囲ともども眼を奪われた私たちに本人は全く気づいていない。仲間の前ではいつも無粋をかまえていたのに、何時着替えて出直してきたのか、デザインの夢に輝いていた彼の青春の1ペー

ジとして懐かしい。

そんな彼がドイツ語を学び始めた。ウルム造型大学への留学が目的であった。米国に渡りチャールズ イームスに学ぶ吉岡とはここでも対照的であった。ウルム留学生活は充実していたようで、卒業後はIDの教授だったハンス グジョロの事務所に誘われ、そのままドイツ生活が続くかと思わせたが師の急死で帰国、本格的GKメンバーとしての活躍が始まった。

折りしもGK内では都市への関心と道具論の萌芽期、カウフマン財団の国際デザイン研究賞を受賞した提案のうち、ストリートファニチュア編は彼の担当で、その後環境デザインの確立を目指した彼の進路に大きく影響を与えたといえよう。

メンバーも20名を超え、株式会社として組織化を始めたGKでは、野口、西澤、金子修也の3人の役割は調査室。目的はプロジェクト開発で、自主提案研究専任チームの発足であった。まもなく始まった70年万博プロジェクト、丹下研に協力したサウジアラビアのメッカプロジェクト、つくば万博、横浜博など、その後のGK史にも大きく影響を及ぼしたさまざまな総合プロジェクトには、いずれもこの3人が名を連ねたが、IDから環境へのチャレンジを見事に着地させたのは努力の人西澤健であった。

惜しまれつつ米国で亡くなった吉岡は享年47歳。その才能と奇才ぶりでGK史を走りぬけ伝説の人となったが、西澤の頑健な身体に誰もが長命を信じ、律儀で着実な人柄には次世代GKの確かな骨格づくりを期待していた。期待には必ず応えた人であったのにと、そして若い日に垣間見たバイクを駆るパフォーマンスが、年経てどんな洒脱の味を見せたであろうかと、短い病臥にあわだしく見送った無念の思いはいまだに消えない。

「惜別」

小木原 光治（GK デザイン機構代表取締役社長）

GKデザイングループは一昨年の秋、創立50周年を迎えたが、西澤さんはGKデザイン機構

代表取締役社長として記念事業を指揮し、更なるGK50年を目指す期待を一身に背負いながら、病と闘われていた。そして突然訪れた「西澤さんの死」という誰もが信じられない現実

に皆愕然とし、その存在の大きさを今さらのように思うのである。西澤さんは、環境デザインの分野を切り開き、GK設計を設立して事業化し、GKのみならずデザイン界の歴史の一翼を担う存在であったといっても過言ではないだろう。

西澤さんの仕事にたいするあくなき情熱と真摯な姿勢は周りを共鳴させ、頼りにされ、またその人柄には多くの人が魅せられたのではなかろうか。

西澤さんの環境デザインの出発点は、何と言ってもドイツ（ウルム造形大学留学）にあり、西欧的秩序観を基にしたシステムデザインにある。そのドイツのウォール社とインテリジェント機能を備えたバスストップを開発した。現在、初の日本のデザインがベルリンを始め欧州各都市に展開設置されつつある。西澤さんが、その完成された姿を見ることなく逝ってしまわれた事を、実に残念に思う。

また近年は、環境デザインの美学の構築に意欲を示し、西欧的な「秩序の美」から永年の実践と実績を基に、都市環境の多様性、複雑性の実態を踏まえた新しい視点「まだらの美醜」を提起された。日本の美意識による新しい美学の構築が大いに期待されていた。

西澤さんの環境デザインの開拓者としての使命感、そしてGKデザイングループのリーダーとしての責任感は病床においても最後まで衰えることはなかった。

昨年の10月13日、四十九日の法要が営まれた西澤家の菩提寺は、郷里の松本市を眼下に望む丘の中腹にあった。

納骨の法要は雨の中で行われた。そして参列者一同丘を下り、西澤さんが郷里に思いを込めたプロジェクト「松本城周辺道路景観整備計画」の足跡を確かめながら散策するころ、空は晴れあがった。それは西澤さんの笑顔のように輝いて見えた。

西澤さんは毎日、この丘の上から松本市を望み楽しそうに、そしてすこし心配そうに見守りながら新たなデザインを描き続けているに違いない。



受け継ぎたい「価値創造の精神」

宮沢 功 (GK 設計社長)

西澤さんは私が1959年入社当時の直属の上司で、以降ヤマハ発動機のプロジェクトから始まって約43年間、共にGKのデザインに関わってきた。私は今年63才なので生まれてから約三分の二、成人してからのほとんどを西澤さんと過ごしたことになる。その中でインダストリアルデザインの世界から環境デザインの世界へ、はじめの頃は何も分からないままただついて行くだけ、途中からは興味を持って積極的に入り込んで行ったように思う。

この間、ストリートファニチュア、道具、装置、道路、広場、空間、地域とその対象、領域は拡大してきたが工業デザインの考え方、アプローチの可能性を環境デザインの世界に対して試みられたことが今のGK設計の基礎になっているといえる。

常に原点としてのもののあり方、表層の表現にとらわれない、本来的な造形のあり方としてのモダンデザインを追求していた西澤さんは、どんな領域のプロジェクトに対してもその姿勢は変らなかつた。

初期のヤマハ発動機のプロジェクト、オートバイ、ボート(カタマラン型)、スノーモビル、船外機などヤマハにとっても日本にとっても初めての商品開発では、奇をてらわず常に原型としての形、商品のあり方を追求してきた。また、京都信用金庫のプロジェクトでは建築家、グラフィックデザイナーとのコラボレーションによる、総合的な空間づくり(環境づくり)の中で工業デザイン的手法による道具の役割と、違う専門家との協同作業の意味、楽しさを教えられた。

そしてなんとといっても西澤さん自身の大きな

エポックポイントであり、今のGK設計の基盤となるきっかけとなったのがEXPO'70・日本万国博覧会のプロジェクトである。詳しいことは後のページで触れるが、これを契機に西澤さんは都市環境におけるストリートファニチュアの大切さを提唱し、ストリートファニチュア(当時はサイトファニチュア)研究会の立ち上げ、その延長線上での都市づくりパブリックデザインセンターの設立がある。日本万国博覧会の前後はプロジェクトと平行して「都市と装置」「装置広場」「ストリートファニチュア」など道具(ストリートファニチュア)から環境を指向する様々な研究と出版、そして各種、機関誌、学会誌、業界誌への執筆が活発であった。

この様な活動の結果と工業デザインをDNAとするGKグループの特性が、今までになかった道具(人)の視点から環境デザインを考えるとこの領域を確立した。そして、1982年GKグループの中で環境デザインを領域とするGK設計が設立、その後はストリートファニチュア、サインからの環境づくり、道路、広場、建築、地域計画、景観計画へと領域を拡大してきた。

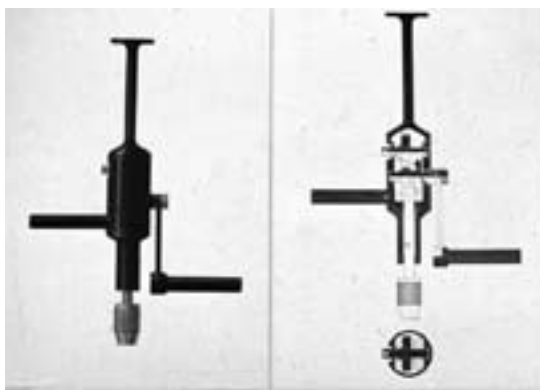
私自身、西澤さんと共に仕事をしてきた中で、都市環境におけるデザインの重要性、常に新しい社会的価値を創造する姿勢、そして何より、人にとって一番身近な道具から都市を考えることの重要性を教えられた。

これからは、教わったノウハウを生かしながら、西澤さんが常に姿勢として持っていた「新しい価値創造に挑戦する」という精神を受け継ぎ、より感動的な環境づくりに専念したいと思う。

西澤健の創作世界

環境創造の原点としてのドイツ・ウルム造形大学留学

西澤健追悼特集



道具からの出発

原点としての道具のデザインは、生涯変わらぬ創作の基盤であったに違いない
モダンデザインに基づく「道具の美」をここに見る

道具からの出発

「道具」のデザインは西澤さんの原点的世界である。ウルムに学んだモダニストにとって、それは終生変わることのない存在だったのであろう。

「道具」とは狭義のプロダクトデザインの対象物のみを指すものではない、むしろ生活の本質から発想する哲学と言ってよいものである。従ってその対象は無限に広い。そして、そこにある「モノ性」は根源的な価値観といえるものだ。西澤さんの活動領域は、道具から環境へ、そして都市へと拡大していった。しかし、その発想の基本には、常に「道具的価値観」があった。これはまさしく、GKの発想法としての「Everything through Industrial Design」と共通するものでもあった。

道具的方法論と美学の展開

「単位の集合によるシステム性、個体としての機能的完結性、改変可能な仮設性、場所をえらばぬ可動性、複製可能な量産性」これらは道

具の特性をあらわす要因である。

また、「形態の数学的整合性」に秩序の美を見出す姿勢は、モダンデザインの基本とも言える。西澤さんは、これらの道具的特性とモダニズムの美意識をもって環境デザインの新しい世界を開いてきた。

こうしたデザインに対する取り組みを、いくつかの作品のなかから振り返ってみたい。まず、TEACのオープンリール式ステレオテープレコーダーを見ると、徹底したモジュール美を追求した端正な姿に驚かされる。ウルムに学び、ブラウンデザインの創始者であるH.グジョロに学んだ瑞々しい感性を感じる。また、今や意外に思えるが、乗り物のデザインも手がけており、ヤマハ YAT1はモーターサイクルのスケルトン構造のなかに、個々の部品群をバランスよく配したエレメンタリズムの美を構築した。さらに、ヤマハの実験車両YX-30では、当時のクルマ原型に忠実な葉巻型シェープのスポーツカーまでデザインしたのだ。



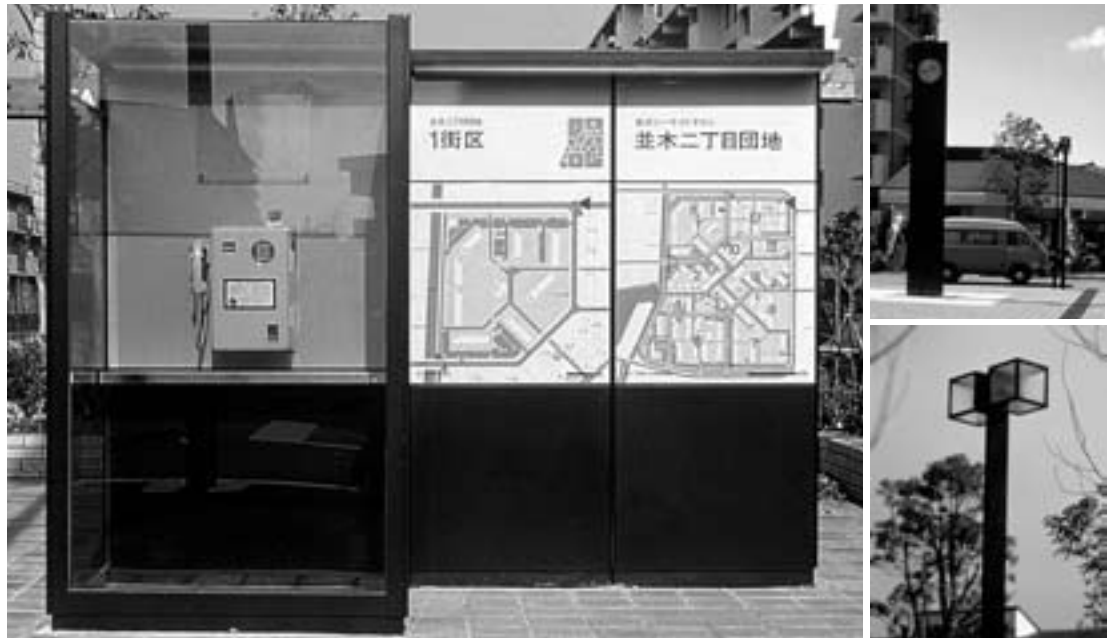
端正なモジュールの美を感じるオープンリール式ステレオテープレコーダー TEAC R-1100 1964年



エレメンタリズムデザインのヤマハ YAT1 (検討モデル) 1963年頃



スマートなデザインとは何か。ヤマハ YX-30 1960年



今日、都市基盤整備公団の標準デザインとなった金沢シーサイドタウンサイン・ストリートファニチュア計画 1981年

このようなIDの本道を経て、西澤さんのライフワークとなった「公共のデザイン」領域へと展開していった。GK設計設立初期の数々のプロジェクトは、前人未踏の新領域を拓き、公共環境領域で数多くの原型的デザインを生み出してきた。金沢シーサイドタウンのサイン・ストリートファニチュア計画では、システム化されたシンプルで原型的なデザインにより、今日のスタンダードデザインの基本をつくった。これは現在、都市基盤整備公団の標準サインともなっている。また、大阪市サイン計画においては、情報のヒエラルキーに基づく、広範なサインシス

テムを作り、公的サインの原点的プロジェクトとなっている。

このような、特定の場を対象としたプロジェクトの他、公共環境を対象とした数々のストリートファニチュアをデザインし、グッドデザイン賞の公共環境部門大賞を度々受賞している。その一つに、ヨシモト集合ポールがある。これは、道路上の照明、標識、信号、サイン、など多様な機能要素を統一的なシステムによって集約化し秩序だった街路景観を形成しようとするものである。これは、まさしく、道具の思想に基づく装置環境の具現化でもあったのだ。



公的サインの原点的存在。大阪市サイン計画 1982年



道路施設の新しい秩序を作ったヨシモト集合ポール 1987年

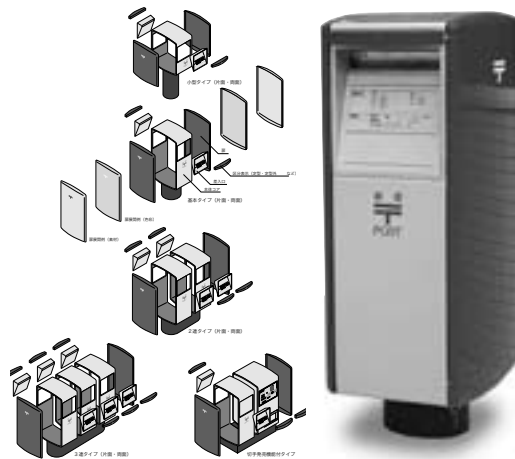


欧州向携帯電話 NEC P4 (左) 1999年、携帯電話の原点NTT803型 (右) 1987年

夢再び、IDから環境をデザインする

GK設計の設立後、インダストリアルデザインの混迷に憂いた西澤さんは、IDの正道を目指し、再びプロダクトデザインを手がける。特に、現代生活に欠くことの出来なくなった携帯電話の開発初期には、NTTの初期商品のデザインを全面的に手がけ、モダンデザインの美学に基づく数々の逸品を生み出した。中でも初代普及型携帯電話803型は、和鉋の美意識に基づく記念碑的作品となっている。

道具領域の最後に「公共性」を重んじた西澤さんの代表作2点を紹介しよう。一つは、郵政省新標準型ポストである。郵政100年の歴史のなかで、初めて統一的なシステムデザインデザインとして、7年あまりの歳月を経て世に出たスタンダードデザインである。最終的には、実務現場の判断により、オリジナルとはやや異なったものとなったが、国の標準を作った価値ある



多様な機能をシステム化した郵政省新標準型ポスト 1996年

プロジェクトであった。

そして、ドイツベルリン市の新標準バスストップがある。これは、今日注目されるPFI事業による都市整備の対象となるものであり、太陽電池を用い、公衆型インターネット端末を備えた先端のストリートファニチュアである。

ウルムに学び、モダンデザインに青雲の志を立て、パブリックデザインに命をかけた西澤さんにとって、ベルリンのバスストップはまさに心の故郷に錦を飾る思いであったろう。

その、価値ある仕事の最後の現場を、西澤さんはついに目にすることなく逝ってしまった。さぞや、現地を見たかったであろうことを思うと悔やまれてならない。せめて、GK設計がその思いを引き継ぎ、活動し続けていることを高みより見守っていて欲しいと願わずにはいられないのである。



太陽電池、インターネット端末など先端のITを取り入れたベルリン市新標準型バス停 Wall Coporation Intelligent Buss Shelter 1999年

ポン・デザール (Pont des Arts) は語る (抜粋)

セーヌ川に架かるポン・デザールの、軽快かつ繊細な機能的構造的美しさ
新しい価値観や美意識を読みとる洞察力と先見性が、この橋を今に残したのかもしれない

西澤 健 (初出『橋梁 VOL.28 No.11』橋梁編纂委員会発行 1992(平成4)年11月より転載)

筆者がはじめてパリを訪れたのは今から30年ほど前のことである。そのとき、案内書や書物に書かれている有名な街路や街並み、広場や建物、運河や橋を現実の姿として見せつけられ、さすが芸術の都パリだなと思った。多少目も慣れてくると、まだ書物などで紹介されていないものにも興味が湧いてきた。その中でもっとも印象的だったのは、“Pont des Arts (芸術橋)”である。セーヌ川に架かっている橋の多くが、石で造られた重厚で華麗なものであるのに対し、ポン・デザールは、鉄で造られているために軽快かつ繊細で、一見、ひ弱に感じられる。しかし、それが新鮮にも感じられる。特に、光に映し出され、水面に投影される情景は素晴らしい。早速、この橋のことを調べてみると、1804年に完成(現在のものは1985年改修)ということであった。エッフェル塔が出来たのが1889年であるから、それよりも85年も前に造られたことになり、なおさら驚かされた。私はこの橋から二つのことに思い及んだ。一つは、当時の美的価値から遊離したような橋を設計したデザイナーと、この橋を事業として施工を決定した責任者の目の確かさである。現在においても新しい試みを行うとき、往々にして問われることは、「他に前例があるか」ということと、「設計主旨についてわかりやすい説明ができるか」である。前者についていえば、新しい試みに前例があるはずがないし、個性の時代といわれながら、前例という類似を求められるのであるから、結果的に新しくもなければ独自性も生まれてこないのである。後者については、わかりやすい説明ができる形を追い求めれば求めるほど、既成概念にとらわれるか、一步間違えると稚拙なものになってしまう。

具体的にいえば、近ごろ目につく斜張橋である。大型橋のほとんどが斜張橋にライトアップを施して、どこの橋か少々わかりにくい場合がある。区別できるとすれば、周辺の地形や

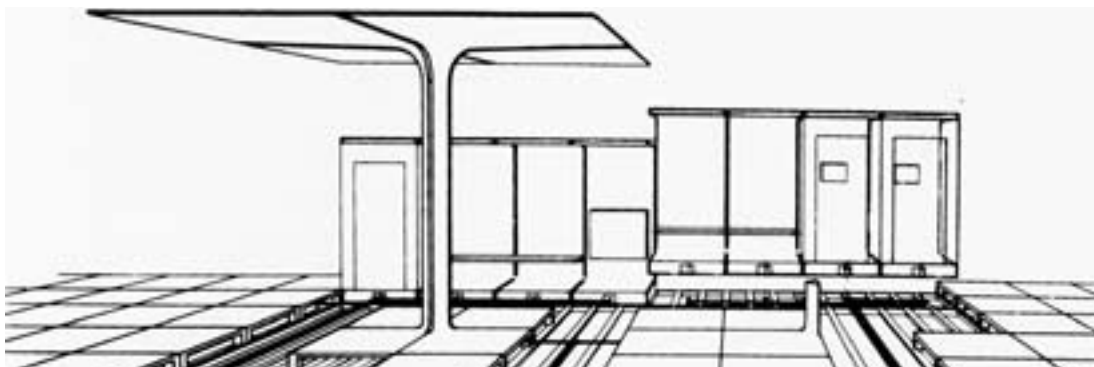
建物の配置や形との相関関係に頼ることとなる。まだ大型橋であれば良いのであるが、このような構造を必要としない小型橋にまで流行のように取り入れている状況を見ると、首を傾げざるをえない。また、装飾的な事柄になると、東海道沿いの橋だからといって、参勤交代の絵図を親柱の高欄に埋め込んだり、海に近いといってヨットやイカリ、カモメなどをモチーフにしたものもある。さらにその地域の物語性を強調する意味でおとぎ話などを表現する。このような表現行為に深い意味があれば別であるが、たんに説明しやすいからというだけでは情けない結果となってしまふ。ポン・デザールの事業にあたり、前述した二つの問い掛けがあつたとしても、それに十分に答えることはやはり不可能であつたに違いない。それよりも時代の変化に対して、新しい価値観や美意識を読みとる洞察力と先見性が、事業の意志決定を促したのであろう。今必要なのはこのような決定なのかもしれない。

もう一つは、造形の問題である。ポン・デザールができる以前は、石が主たる材料であつたため、量的なオブジェとしての存在感があつた。ところが、新しい橋ポン・デザールは空間的オブジェとして位置づけられる。しかも、鉄の素材の組合せがアーチ状に構成されたこの橋は、構造的にも確かなもので、特に装飾的部材は見当たらない。それなのに全体が繊細で華やかであり、結果として装飾の結果をかもし出している。要するに、構造美であり、機能美なのである。

30年前は、近代デザインの全盛期であつた。その主軸になつた思想は、機能主義であり、機能から生まれる美的機能が求められていた。その代表的言葉に「形体は機能に従う」(Form follows Function)がある。このような言葉を誘発し、主義にまで到達させたのは、ポン・デザールのような試みがあつたからである。

「装置環境」の展開

「道具の環境化、環境の道具化」を具現化する装置論は、インダストリアルデザインが生み出した環境創造論であった



街路を構成する要素を全てユニット化した装置化提案 1964年

装置とは何か

都市環境を「装置」によって形成する。この考え方は、極めてID的な環境デザインアプローチである。それは、建築を「住むための機械」とコルビュジェが例えたように、屋外環境を「都市生活のための機械」によって構成しようとする合理的なデザインコンセプトである。それは、道路や広場などの空間をかたちづくる要素全てを、量産可能なユニットにより構成し、多様な機能要求に応えようとするものであった。

ここでいう「装置」とは、一般にストリートファニチュア、サイン、照明などの街路施設から、人工地盤や交通施設などのインフラストラクチャーまでの幅広い対象をさすものである。これらを総称して都市の「装置」と言い、「装置」によって構成された空間を「装置環境」と呼んだ。さらに、装置化された空間は建築を生み

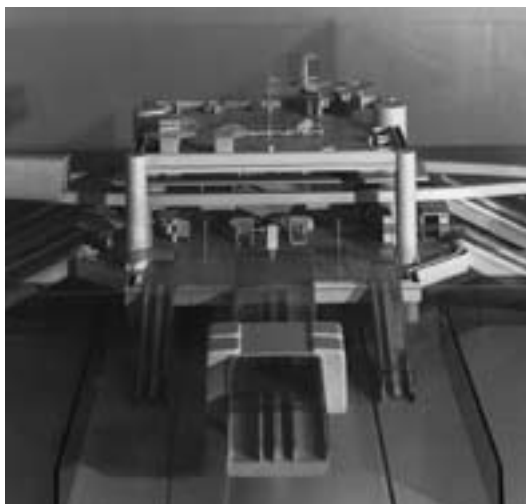
出し、さらには都市までも構築可能なのである。ここに「装置建築」そして「装置都市」が誕生することになるのである。

「装置」による都市環境の提案

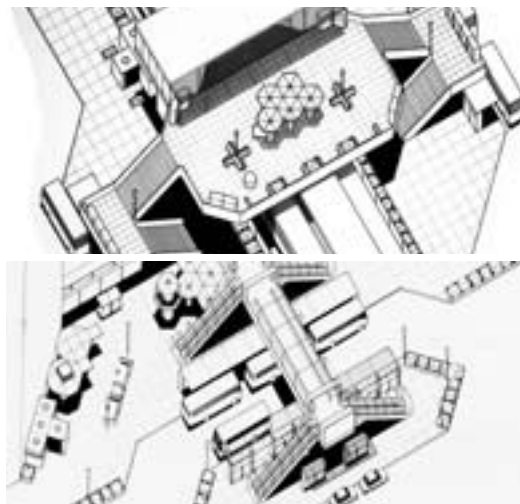
「装置環境」の考え方は、様々なGKの提案プロジェクトのなかに表現されているが、ここでは道具的性格の強い計画をいくつか紹介する。

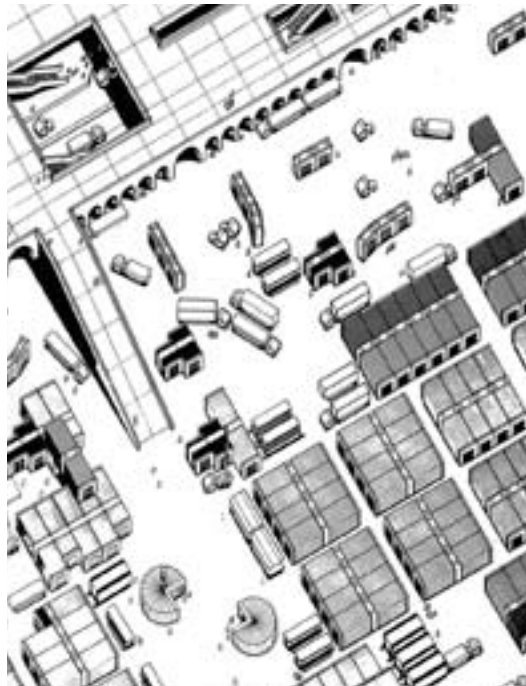
1964年に、ウルムから帰った西澤さんが「道具が生み出す空間」の提案をおこなっている。これは、街路や広場を構成する、舗石、工作物等を全てユニット化しシステムチックにデザインしたものであり、インテリアに例えれば、システム家具とアクセスフロアを一体化したようなものである。このことによって、様々な都市生活機能への対応が、自由かつ効率的におこなえるものである。

さらにこの考え方を発展させたものが「装



道具によって都市に新しいコミュニケーションの核を形成する研究「装置広場」 1969年





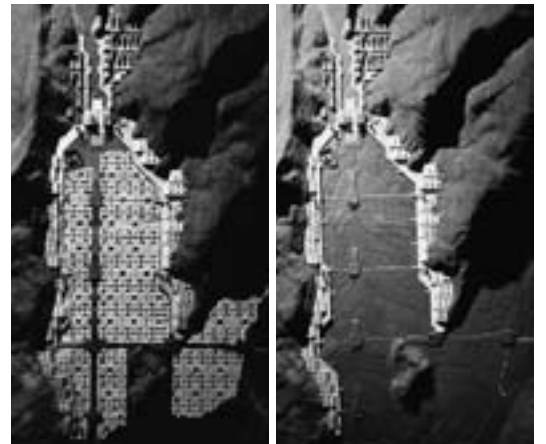
聖地巡礼の集落を営む道具類は、山あいの構造物に収納され、祭事期間のみ忽然と街を形成し終了後は元にもどる「メッカプロジェクト」1974年

置広場」である。これは、都市広場のあり方を、駅やバスストップなどその機能によって8種に分類し、その個々に対応可能な量産化された機能ユニットシステムで空間を形成しようとするものであった。こうしたコンセプトによる環境デザインは、後にパリ・ディファンス地区の人工地盤計画などで具現化されているが、大変先見性のある計画であったと言えよう。

そして、こうした「装置環境」のコンセプトは、サウジアラビアの「メッカプロジェクト」によって集大成される。これは、丹下健三氏の依頼で「メッカ巡礼のための都市装置設計」をおこなったものであり、三週間だけ成立する二百数十万人が集うテンポラリー都市であった。そのアイデアは画期的なものであり、宿泊、飲食、医療などの都市施設群を、巡礼期間以外は全て山肌にそった人工地盤に収納し、ミナの谷を自然に



サウンドスケープを取り入れた初の装置環境「横浜、西鶴屋橋」1988年



帰すというものであった。不運にもファイサル国王の暗殺で具現化には至らなかったが、実現すれば壮大な「装置都市」が誕生していたであろう。

ケーススタディとしての都市環境デザイン

その後GK設計は、「装置環境」を起点として、様々な都市環境デザインに携わっていくこととなる。特に、初期のプロジェクトにおいては、「装置」としての環境形成のケーススタディとして考えられたものが多い。その中でGK設計の原点としての「道具」の特性が強く現れた例を一つだけ取り上げれば、横浜市の西鶴屋橋がある。これは、「サウンドスケープ」の考え方を取り入れた初の事例であり、橋梁の振動を電氣的に検知し、それと連動して音楽が奏でられるというものである。高速道路下というネガティブな環境のなかで、あえて微かな音の響きを聞き取ることによって、歩く人の感性の覚醒をよび、意識を変換させる装置でもあるのだ。しかも、その環境作りとしては、空間と意識の結節点としての橋を、高度に精度の高められたID的パーツの集合体により構成するというものであった。

その他、「装置」としての建築や環境デザインは枚挙に暇がないが、「装置」のコンセプトはGK設計のDNAとして受け継がれていく。そして、さらに地域性や住民参画、福祉、環境問題など「時代のテーマ」を設計方法論の中に取り込みながら、新たな「装置環境」として変化し続けているのである。

育てるデザイン (抜粋)

時代が要請する「実験を通じて場所を作り上げることの価値」の追求
「仮設環境」の手法が可能にする、新しいタイプの都市ユーティリティの生成と展開

西澤 健 (初出『新都市 11.5 第53巻5月号』財団法人都市計画協会発行 平成11年5月より転載)

「ものごと」を育てるということは、計画のしっかりした目標を持ちながら、やり方や方法を固定せず、その時々状況から向かうべき方向を判断しながら先に進めるということです。そもそも、デザインの目的は、ものを使う人やことに関わる人に十分満足のいく状態を提供しようということですから、その時々状況といった場合、まず大切なのは、人々が利用し、関わることで手に入る見えない価値を十分に引き上げようということです。

利用されつづけるものや場所は、利用者とのような関係にあるのか考えなければなりません。場合によっては、実施を急がずに試しながらやるという方法も必要ははずです。実験的にやってみて、良くないようであれば、修正をくり返していくということ。そして最終的に利用価値のあがる方向を探るといこと、つまり実験的な方法論が大事になってくるわけです。

従来はものごとに対して、こうあらねばならないという発想でやってきましたから、必要なものが年を経て価値をなくしていてもやるべきだということでした。しかし、これらのものの計画とその実現は必要なものを利用者の側にたって、しかもいつでも使われる状態をつくっていかうということですから、「ものを試してみる」ということ、ハードであればたとえば原寸の模型でしばらく様子を見てみる、ソフトであればその仕組みを試しに実行して不都合の箇所をチェックしていく、という発想が必要ではないかということです。

実験的方法

この実験的方法論は、いくつかの点で時代が要請しています。まずひとつには、個人を尊重し、社会の多様化がそれぞれの独自性を認めようとしていることです。あるひとつの価値観に基づく環境や空間のあり方は、他の価値観からは否定されるということになります。利用者の中には、あえてそこを利用したくないという人

が出てくる。その人たちに、無理して利用しろという時代ではありません。この点に関しては、気に入った場所や空間を持っている都市に移り住むか、そのような別の価値観に見合う場所を別に作りだすことで選択の幅を広げる必要が生じます。ただ注意したいのは、従来のように単に整備が目的でただ安易につくるだけというのは、もうやらないということを忘れてはいけません。

実験を通して場所を作り上げることの価値の二つめは、都市が常に新しいものを取り込むという面での魅力を持つ必要があるということです。都市は日々の変化をもたらしてくれることが大事です。しかし、その新しい部分、斬新さは、一方で飽きられるということも起きます。やはり都市環境は消費の対象であることも否めません。都市環境の整備は、物的な環境の側面を持ちますから、作るとそのまま長期間残ってしまうという宿命にあります。注意しないと、利用されつづける場所にならないわけです。

そこで、仮設的なものとのとらえ方によって、この斬新さや日々の変化を実現することの可能性を追求して試みるのが重要になってきます。この仮設環境という考え方は、恒久的な環境に対して、やはり実験的な要素を帯びています。

それはお祭りやイベントの際に試みられるものかもしれませんが、屋台や朝市のようにある時間を区切ってなされるのかもしれませんが。最近では、民間の商業や文化施設のなかに数年から数十年という期間を区切って事業を展開するものもあります。いずれにしても、そこにはまとまったスペースを必要とすることは事実です。そうした都市の斬新さを担保する仮設性を持った場所は、都市全体が持続可能な性格になればなるほど必要とされます。仮設環境を実現するに相応しい状況を持った場所をどのように位置付けるか、街路や公園などの規定の空間にどのような条件を与えていけば、仮設性を獲得でき

るのかという検討が必要です。それには周囲との関係において判断することと主役としての人がどのように介在するのかということがポイントです。

三つめは、従来ものごとの決定がトップダウン形式の、いわば「こうあるべきだ」という方向で進められてきたのに対し、これからは「自分はこうしたいから仲間を見つけよう」ということになってきて、賛同を得るために試しに何かをやってみる、作ってみる、という流れが見えてきたということです。新しい価値観への移行は実感を伴うことがなければなかなか変わらないわけですから、実験や検証によって、新しいものが自分達にフィットするかどうかを確認する必要があります。それは利用者も含む、考え方の発案者からの合意形成ということで、ボトムアップの形式といえます。

さらにつけくわえると、この一連の思考の中から新しいタイプの都市型コミュニティというものが期待されます。つまり、同じ価値観や思考を持つ人たちによるコミュニティです。その気候風土が好きだ、この公園のこの場所が好きだ、その好きな感じを維持するには、多少の不便や不足するものがあっても厭わないという感覚でつながっているコミュニティということです。

最後に指摘したいのは、都市のあるいは空間における文化の問題です。敗戦からスタートした日本の環境づくりは、欧米へのキャッチアップの状況下で、欠けているもの、不足しているものに対して過剰に反応し、何でも取り込もうとした点は否定できません。それが東京には何でもあるという錯覚をもたらし、多くの地方都

市にミニ東京化をもたらすことで、地域文化を消し去ってきたともいえます。小京都というイメージとは逆に、ミニ東京化はやはり無いものを補充することによって、らしさをかえってなくしてきたように思えます。

そこでしか成立しないものは、近代化の枠組みから滑り落ちて評価されないまま古臭いものというレッテルを張られたために、逆にそうしたものが今でも残っている場所は、評価を得て地域の個性を感じさせるといった状況です。文化というのは、そこでしか成立しないものにスポットを当てると同時に、地域に必要なものを取り込まないといった姿勢が必要です。参加によって多くの意見が出たとしても、欠けている領域はあるはずで、その欠けているところを欠けていてもかまわないということで合意する姿勢がなければ、文化的空間を獲得することにはつながらないと考える必要があります。

もし地域にないものを取り込むのであれば、この地域でしか成立しないものの価値に磨きをかけるようなものかどうかを考えて判断することが大事です。それが確認できれば、新しいものも古いものもバランスがとれて全体にまとまったイメージが出てきます。そこには、利用する人の価値判断が不可欠ですし、利用上のルールとして、場と人のかかわり合いが重要なほうまでありません。そのような地域が形成されれば、その独特の文化的な匂いとそこに住まい生活をしている人たちの暮らし方に触れてみたいという人たちが出てくるわけです。都市観光という領域があるとすれば、このあたりに可能性がありそうです。



数百年続いてきたお伊勢参りの舞台としての参道に、歴史をとりもどす道をつくる おはらい町「石畳の道」整備事業 1993年

道具から建築そして都市環境へ

GKの建築は、種々の道具の組合せから理想的な住居や都市環境を創造する活動
それはIDの立場から生活空間の新しい型を創り出す壮大な試みでもある

装置論としてのメタボリズム

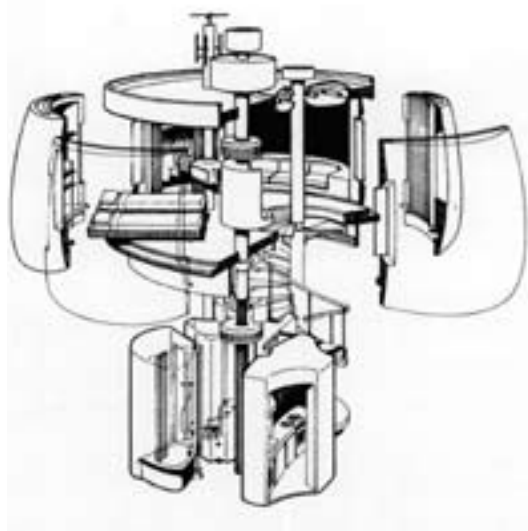
かつて西澤さんは、以下のように述べている。
「メタボリズムというのは装置論だと思う。建築というのはむしろ空間が装置を生んだり、空間が壁を作っているのではあるが、メタボリズムの装置論というのは、装置から空間が出てくる。だから装置を“陽”とし、空間を“陰”として考えられた。つまり、装置と空間がうまく連動しないと生きた施設にならない。」

道具から建築そして都市へ

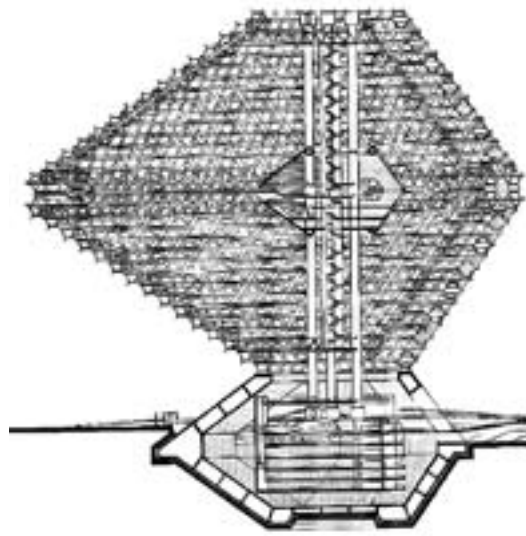
GK建築の原点は、1960年代初頭に提案された「道具論研究」のなかにある。「核住居(カボチャ住居)」「カメノコ住居」そしてこれらの先に、「住居都市(シャンデリア都市)」があった。「核住

居」「カメノコ住居」をさらに集合統合したものが「住居都市」なのである。その住居単位は、三層で構成されている。上部の夫婦ユニットと下部の設備ユニット、そしてその間に形成される広場の三層である。この住居単位の集合によってシェル構造が形成される。この住居空間単位の積層が、巨大都市を造る。

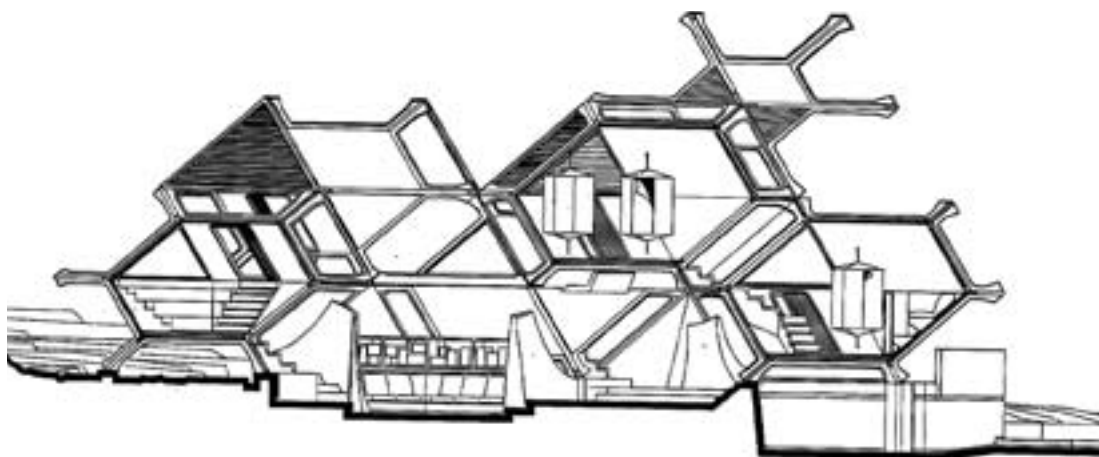
1960年代のGKグループが提案した、道具から建築そして住居都市への挑戦は、この「道具論研究」を出発点とした、種々の道具の組合せから、理想的な住居や都市環境を創造していこうという大胆な試みであった。スケルトン、スキン、オーガン等、この時代にすでに循環型建築の構造と同様の考え方も提案されている。



核住居(カボチャ住居) 1964年



道具を空間化した住居都市(シャンデリア都市) 1964年



居住空間を工業生産化した住宅、カメノコ住居 1964年

自然と融合した環境建築

(軽井沢・塩沢湖プロジェクト)

軽井沢の西南部に位置する塩沢湖を中心とするエリアで、軽井沢特有のカラマツを有する樹林、起伏に富んだ地形や浅間山を背景にしたレジャー基地である。

ここで目指していることは、自然環境を満喫できる「ゆったりした時間」を味わうことのできる新しいレジャー環境創造ということにある。ここでいう自然とは、人の手の入った自然である。樹木や丘や水をどのように見せ、文学や絵画などの文化的風景をいかに重ね合わせるかが計画のテーマであった。

軽井沢高原文庫、この文学展示館は、堀辰雄に代表される、軽井沢をモチーフにして、あるいは軽井沢を執筆活動の拠り所としてきた文学作家の原稿や書類等の資料を展示・保存し研究するための施設である。この建築のコンセプトは、軽井沢・塩沢湖畔の高原特有な風光を内包し、斜面を巧みに活用したオープンな展示空間をつくることにあった。内外の空間を覆うシェルターと展示装置が資料を保護している。風光、霧、緑、カラマツ、浅間の火山岩、軽井沢特有の素材を駆使し、堀辰雄文学が目指した空間イメージを表現している。これはまさしく西澤さんが目指した自然と建築の関係のデザインである。

塩沢湖プロジェクトは、英国のタリアセンの思想を受けながら時間をかけて整備が続いている。建築の基壇に浅間石の野積み、林間に浮かんだ白い紙で端正に折った折れ屋根、自然と溶け合った建築群は軽井沢に新しい風景を生み出している。西澤さんが好きな環境建築の一つである。



軽井沢の空気が感じられる、軽井沢高原文庫 1985年

装置建築としての次世代型ステーション

(JR東日本お茶の水駅 駅舎提案)

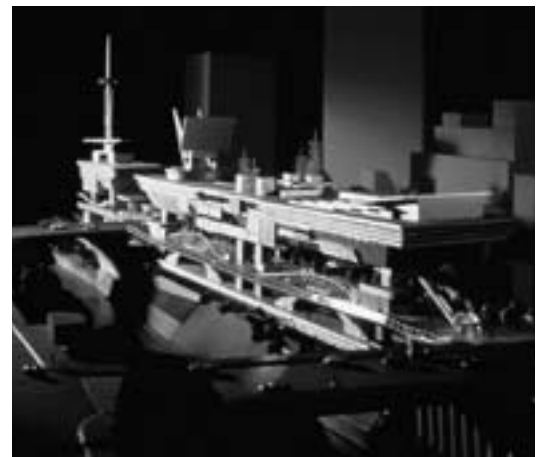
現代において駅舎は街の玄関であり、都市機能を内包した複合建築でもある。大型輸送の安全性、正確でわかりやすい誘導表示、自動改札、LED案内システム等、全ての装置がハイテク化されたまさしく装置建築そのものである。

「JRお茶の水駅コンペ」では、地下のホームレベル、地上の道路レベルをラチ内以外は公開し、自由に市民が回遊できるようにする一方、全ての施設を空中に浮かした。図書館、区の施設、託児所、商業施設、屋上には屋外劇場を設け、24時間対応で未来指向型の強い提案を行った。最終審査の発表の日前後、西澤さんから出張先の欧州より何度も電話が入ったのがいまでも記憶に残っている。最優秀賞は逃し、残念であったが、高度化する情報化社会の駅機能を装置化し、公共施設の在り方を提案出来た意義のあるコンペであったと思う。

最後になったが、ともあれ、限られた枚数のなかに西澤さんとの仕事を全て書き尽くすのは無理である。松本木工館、個人住宅、青山ビル、おゆみの駅、書き残したプロジェクトはまだまだ枚挙にいとまがない。

しかし、全てに共通して言えることは、各提案には社会に対するアピール(提案)があったことである。社会性、運動性、公共性、そして複雑な美意識の追求(たとえば『まだらの美醜』)、すべてが社会に対して開かれていた。

そして我々に対する包容力のある温かい指導も忘れることが出来ない。また、口癖のように“最大の営業は、社会的評価の高い良い作品を世に出し続けること、それ以外にない”と言い続けられた言葉を忘れることはできない。



装置建築としての駅舎提案、お茶の水駅駅舎提案コンペ 1989年

「お揃いの美」から「まだらの美・まだらの日本」へ

「まだらの美」は、「見立て」によって価値観の統一された集まりの美しさである
日本人らしい繊細な感覚で、心が沸き立つような「まだら」の都市が出来れば素晴らしい

西澤 健 (初出『イベント都市 Vol.32』 都市イベント企画会議発行 2003年より転載)



祇園祭の図(部分) 17世紀製作 京都国立博物館蔵

日本へ訪れた欧米人がその様子を「玩具箱をひっくり返したようなパビリオン都市」と評したのは、1960年の東京オリンピック、続く大阪万国博覧会の頃の話である。大阪博のテーマは「進歩と調和」であったが、反して日本の街の様子はまるで不揃い、統一感に欠けるといったところだろう。徐々に海外旅行も一般化し、欧米へと出掛けていった日本人は揃ってその美しい街並みに驚いてしまう。「最近西ドイツミュンヘンを訪れたが、日本に比べ、どう見てもミュンヘンの街のほうが美しい。なぜかと言えば多くの色、形、高さ、材料、そして環境の間に調和と統一があるからである。それに対して日本の建物は一軒一軒が勝手気ままな方向を向いており、全体的調和と統一を欠く」と言う著名人もいた。確かに古風で堅牢なヨーロッパの都市、美しく整った街の景観は素晴らしく、訪れる私たちが感動させずにはおかない。

しかし、日本の歴史や文化、その芸術や美術

を見ると、ヨーロッパの様式美では計りきれない独特の美意識と価値観があることに、私たちは気付かなくては行けない。これは私見で、若干偏りのある考えだが、私はそこに八百万の神を信仰した柔軟な民族的土壌を感じている。数年前、ドイツからの友人を武蔵野の住宅街へと案内したが、彼はその風景に「非常にユニークで日本独特のものだ」と感心していた。まず櫛の大木に巻かれた注連縄を不思議に思ったようだ。私とその由来に加えて八百万の神の話をする、ひどく驚いていた。キリスト教圏の人たちからは思いつかぬことなのであろう。また屋敷毎に異なる植樹も、彼の興味の対象であった。紅葉、梅、松、椿、とりどりの庭木が植えられている様子は彼には目新しいものらしかった。なるほど、西洋の住宅街では皆お揃いの植樹と芝生で統一され、それがいかにも「らしい」景観を作り出している。

この色とりどりの様子は、日本の食卓にも見

ることが出来る。西洋を含む殆どの国では、正式な食事の際、揃いの食器が用意される。フランス料理、中国料理、また隣の韓国でも然りである。だが、日本の懐石料理では、白木、竹、漆、陶器、磁器、鉄と、さまざまな種類の素材を用い、不規則な形、柄、色付けの器が並べられる。一見不規則に思える選択や配置は、妙なる調子と楽しみを生み出している。それは季節感であったり、何かのメッセージを込めて選び抜かれた集まりである。あたかも曼陀羅の世界の美を、自分たちの生活の中に取り込み表現したかのようだ。「曼陀羅」は「まだら」に変化する。掛け軸、飾り物といった部屋のしつらえから、料理の内容、そして食器類の選択、配置、全てに心が込められている。また見る者、受ける者はその想いや意図、心尽くしを汲み取らなくてはならない。こうしたやりとりは「お揃い」以上に深淵な美意識を必要とし、長い間日本人の生活を潤し、楽しませてきたものである。

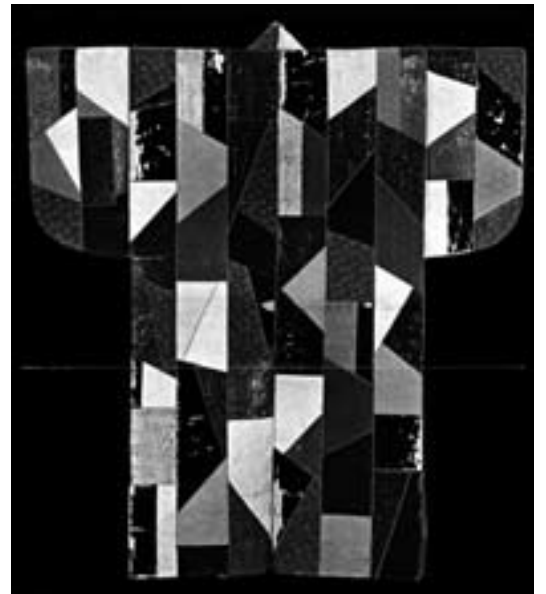
一つ一つがばらばらであっても、ある価値観の中で一つに集められたとき、それが美しい一個になっている。取り合わせ、配置、バランス、タイミングの見計らい、この行為を「見立て」と言い、感覚に優れる者は「目利き」と呼ばれた。これが「まだらの美学」、日本人独特の価値観である。

見慣れぬ目にはお揃いに見えたらうミュンヘンの街も、歴史と共に変化した様式が反映している。ゴシック、ロココ、バロック、そして新古典様式が渾然一体となって魅力的な風景を作り出しているのである。

「都市全体の荘厳さがおのおの異なる詳細部の尽きない美しさへと分かれていき、同一の対象に出会うことがなく、端から端へと動いていくと街区に何かしら新しいもの、特異なもの、



懐石料理 加賀



金銀欄綴子等縫合胴服 上杉謙信着用 上杉神社所蔵

胸を打つものがあり、秩序ある反面、一種の無秩序があり、全てが街路に添いながら、単調さを避け、さらに多数の不規則な部分から全体として相応しい一定の不規則及び混乱の概念に至るようにせねばならない。(都市の美装—三宅理一訳)」これは18世紀、フランスの評論家ロージェの言葉である。少々長かったが、ここに引いたのは現代の日本に是非活かして貰いたいと思ったからである。都市の美しさは単にお揃いの行列によって生み出されるものではない。一つ一つの器の精度が高くなければ懐石盆の美しさが成り立たぬように、都市にも「目利き」が必要である。建築、土木施設のそれぞれが優れていなくてはならない。また街のスケール感に合わせたバランスも肝心である。まだらな集まりが美しくなるか、醜いものになるか、そこは「見立て」の感覚による。

徒に西洋の模倣をするべきではない。文化、歴史、民族性の違いがある。日本人ならではの美意識を思い出したい。むしろ、私は「パビリオン都市」「玩具箱の街」を大変結構だと思っているくらいである。日本人らしい繊細な感覚に誇りを持ち、深い味わいのある街並みを創り出して行って貰いたい。大切なのは、形式や様式にとらわれず、何か目指すべき共有すべきテーマや気分を持つことである。住んでみて、歩いてみて、心が沸き立つような楽しい「まだら」の都市が出来れば素晴らしい。日本人がながく磨いた感性を豊かに使い表現することで、世界に類を見ない街がそして都市がきっと生まれてくるだろうと信じている。

拡がる環境、限りなき挑戦

道具設計からの視点による工業デザイン手法の展開と人の視線での環境づくり
変化変容し拡がり行く環境に対して、GK 設計の限りなき挑戦は続く

GK設計における環境デザインのプロジェクトは、工業デザインを基盤としたストリートファニチュアによる環境形成から、道路、広場、地域計画とその領域を拡大してきた。新しい領域に対する環境デザインの取り組みに対しても、工業デザインの特性であるシステム性、完結性、可動性、量産性、均一性等を生かした、道具設計の視点、人の視線による環境づくりが基盤となっていた。初期はストリートファニチュア、サイン計画を中心とした環境デザインが試みられた。その代表的なプロジェクトに「金沢シーサイドサイン・環境計画」「昭和記念公園」をはじめとする国営公園のサイン・ストリートファニチュア計画、そして、筑波研究学園都市、大阪、浜松、広島、西新宿などの都市のサイン計画がある。西新宿のサイン・環境計画は、東京都庁の新宿移転に伴って、東京都の環境CIの一貫として西新宿地区一体の新都心としての空間アイデンティティを明確にし、地区の構造を分かりやすくすることであった。ここでは一般的なサイン計画と平行して、交差

点、地下道等、環境を構成する主要な空間を視覚的に顕在化し、空間にランドマーク性を持たせ記号化し、道路灯、信号、交通標識等、のストリートファニチュアによって地域のわかりやすさ、空間の記号化、新しい都市イメージの創出が試みられた。

1978年に設計された鹿島神宮参道計画では、人工と自然の融合、歩道と車道の共存、車椅子に優しい坂道などを主な提案事項とし、全体をグリッド状の基盤の上に、歩道、車道、水系、植栽、ファニチュアなどの景観構成要素をシステム化して計画し、装置広場研究の考え方によって道路空間全体に、ある秩序感を出しようにとしたものである。

1990年に竣工した晴海通りは道路を構成する大小の街路灯、サイン及び交通標識、信号柱、車止め、歩道のペーブメント等によって道路空間の特性を表現した良い例である。東京都CI計画の一環としてのシンボル道路事業モデル路線として、明治時代のガス灯発祥の地に代表される歴史的な銀座通りと交差する新しい軸と



ストリートファニチュアの統合により空間をランドマーク化した西新宿サインリング 直径 54m 高さ 15m 1994年



グリッドシステムによる空間の一体化 鹿島神宮参道 1981年

して、江戸東京の中心、皇居から始まり21世紀に向けて開発が進む臨海副都心に至る「未来都市東京の軸」と位置づけられた。その基本方針は第一に晴海通りの持つ地区特性を照明灯に反映、アームのない柱構成と、縦格子を連想させる造形により通りの個性を表現。第二は白御影によるモダンですっきりした舗装・ポラード・植栽柵等を用いて路面全体の広がりともとまりをつくる。第三は道路機能として必要不可欠な標識類の整理・統合を多様な取り付けシステムを持った板状の標識ユニットによって景観的秩



ストリートファニチュアによる新しい表情の晴海通り 1991年

序をつくっている。1991年度SDA賞、1993年度都市景観大賞、景観形成事例部門受賞を受けている。

1992年に竣工した松本城の周辺を巡る道路、宮渕新橋上金井線は、松本市の都市景観形成モデル事業として計画され、国宝の松本城、お堀、桜並木等、全体景観の中で道路とそれを構成する照明、信号、橋等の道具類を全体景観の「地」の役割と位置付け、日本の伝統的な水平構成を踏襲した計画によって松本城や松本神社の歴史的景観保存と、現代の市街地景観の共存・融和



松本城をひきたて、日本的な「地」の道路空間をつくる 宮渕新橋上金井線改良事業 1992年



駅舎と広場を一体化するダイナミックなシェルター おゆみの駅 1999年

を目指し、歴史的な都市の記憶を内包した現代の道路として蘇らせた。深志橋掛け替えに当たっては道路と連続するデザインとし、信号機を松本城への東門的な位置づけとし、柱類を集約したゲートとして整備した。1993年第5回全国街路事業コンクールで建設大臣賞を受賞している。

1998年竣工の千葉急行線は、千葉・市原ニュータウンの地区内を縦貫する新設鉄道である。鉄道系、歩行者系、自動車系が密度の高い交通結節点をつくっているおゆみの駅に対し、千葉急行線の沿線景観や沿線イメージを形成するラインアイデンティティと、駅舎、駅前、センターゾーンの一体的な景観誘導を図り、駅前広場とその周辺の連続的な空間構成と総合的な景観形成を実現した事業である。そのために周辺を含めた全体の計画と同時に駅舎、駅前広場のシェルター、照明灯などのストリートファニチュア類の一体的デザインが新しい町の玄関口としての表情をつくっている。

地域計画としての西伊豆町のプロジェクトは、まさに計画とものづくりが一体化した新しい環境デザインの在り方の一つの事例であろう。西伊豆町との付き合いは1985年に町の公園を設計したときから始まる。その後1988年に町全体の環境デザイン診断として、環境計画調査を行う。その後、月一回程度のペースで関係部署を横断的にした環境デザインの勉強会を開き、環境に関する様々な意見交換、相談を行ってきた。その中から必要な施設を選択し、町の環境計画コンセプトに基づき、地場の素材を活用する等して一つずつ作り上げていく。地域にとって一つの点にしか過ぎない施設は、点から線へ、線から面へと広がり、地域のアイデンティティ形成へと繋がるのである。その施設には、井田子水門をはじめ堂ヶ島温泉飲泉所、浮島海岸トイレパーク、消防センターと広場が一体になった旧庁舎跡のギャラリーパーク（仁科広場）道路交差点の空き地を利用したギャラリーパーク（田子上広場）などが現在出来ている。



物心共に西伊豆町の中心となる井田子水門 1988年



小さなスペースにも地域特性の表情を 田子上広場 1988年

必要とされる個性と美意識

都市づくりに携わるものとしての責任と^{きょうじ}矜持を、自信をもって主張しよう
作り手の個性を発揮し、美意識をもって都市の構築を目指していこう

西澤 健 (初出『JUDI NEWS 051』 都市環境デザイン会議発行 2000年1月より転載)

工業デザイナーとして都市づくりに正面から係わることが出来たのは、1970年の大阪万国博の時であった。当時は都市論や建築論が華やかな時代でもあり、そこでは都市を専門とする友人たちと出会うことになった。そしてまた多くの事柄を学ぶ機会ともなった。

「都市計画とは法律」であるとか、「都市デザインは空間である」とかいった言葉が印象に残っている。私たち工業デザイナーがその都市づくりに参加し、担った役割は、都市の部品(工作物)と呼ばれるストリートファニチュア(SF)のデザインである。

SFの基本概念は「都市の生活機能を支えるもの」としたが、一般的には都市の表層として最終的な化粧とも考えられている。そのため良質な空間を創出しても、表層が稚拙なために残念な結果となってしまう場合が多々ある。SFと呼ばれる部品は工業製品として生産されるが、その小さな一つ一つも設置に至るとき、その量と質とで空間を支配する力を持つ場合がある。このように考えた時、都市は多くの立場の異なる専門家や生活者の人々がそれぞれの立場を主張しながら作り上げるものである。従って都市は「多くの人々が共に作り上げる終わりのない芸術である」と納得してみる。

立場の違う専門家たちが集い、情報交換をし、議論する場が必要とされた。そこで「都市環境デザイン会議」が発足したのだと私は理解している。ただ、当初問題となったのが、「メンバー」である。都市に係わる重鎮をお呼びすればやはり高齢となり、そのような諸先輩はそれぞれに都市という個性ある芸術を追い求め続けて未完成の絵を持っておられる。それを継承していくのか、あるいは新しい白いキャンバスに新しい絵を描いていこうというのか、という選択が浮上したのである。

選んだのが後者、そこで当時年齢50才前後を上限として若いメンバーに参加を呼びかけた。

現在、都市づくりは「キャンバス」という表現媒体を超え、時間と五感へと広がっている。またその社会的規範となるものが情報や環境、福祉問題へ、さらにはエネルギーや新交通、その上には歴史や地域性などを鑑み、方法としては市民参加などといったことも認識しておかなくてはならない。次世代都市はこのように複雑な諸要素を解き、そのなかで新しい都市文化を創出しなければならない難しさがある。

実際、その成果は着実に得られつつある。ただ、忘れてはならないのは、市民参加や地域性、あるいは緑化といったキーワードに依存することなく、作り手の個性ともいうべき美意識を高揚させ、感動を与える都市の構築を目指していくことである。

ひとつ、気になっていることがある。現在市町村は約3,300あるという。その行政組織の中に都市デザインあるいは景観という役割を担う部署や政策を持っている役所がどれくらいあるかといえば、約1割程度である。部署などの有無で評価するのは少々先走りすぎるが、少なくとも関心のない市町村が多いということが分かる。

今後都市環境デザイン会議として、デザインの重要性を残る8~9割の市町村に理解してもらえよう、努力していくことも課題の一つなのではなかろうか。



大阪万国博 ストリートファニチュア (会場サイン)

博覧会プロジェクトがもたらしたものの

環境デザインにおける道具の役割を明らかにし、工業デザイン的手法の有効性を示す
道具の視点、人の視点からの環境づくりの可能性を拡大し、その社会的意義を証明する

GKとして博覧会に関わったのは、1970年・日本万国博覧会、1985年・つくば科学技術博覧会、1989年・横浜博覧会、1990年・花と緑の博覧会、そして開催はされなかったが1996年に予定されていた世界都市博覧会（東京フロンティア）、2005年開催予定の愛地球博の六つになる。その中で西澤さんは1970年・日本万国博覧会から、1996年予定だった世界都市博覧会までの5つに関わっている。西澤さんが工業デザインという視点から環境の世界に視点を広げた背景には、博覧会プロジェクトに関わったことが大きく影響している。それぞれの博覧会で会場計画専門委員会のメンバーとして工業デザイン、特にストリートファニチュア計画の立場から環境形成に関する貴重な提案をしている。

特に1970年の日本万国博覧会では、環境計画に対し初めて環境形成におけるストリートファニチュアの役割を明解に示し、ストリートファニチュアの社会的位置づけを提示したものととして重要である。当時、造園計画の雑件として扱われていた様々なストリートファニチュアを環境構成要素の大切な要素として位置付け、個々のファニチュアの機能を前提としなが

ら、環境形成の重要な要素として提示している。当時の報告書には、その目的を、第一に協会が会場に用意するサービス施設としての機能。第二に会場計画の上で、会場構成の構成単位として果たす演出的役割である、としている。そして基本方針として「安全なること」「能率的であること」「快適であること」「量産化を目標とすること」とし、会場環境への適応方針として、万博会場に於ける主体はあくまで各展示館であり、主なる基幹施設である。ストリートファニチュアはこれらの「主」に対して観客へのサービス施設であることの「従」の姿勢が守られるべきであると位置付けている。そのためのデザイン方針を、個々のストリートファニチュアの機能条件を十分ふまえた上で、健康な表現、簡素なデザインとし、これらが群をなした時、会場の大きな空間の中で全体を視覚的につなげ、リズムを構成する大きな役割を果たさなければ成らない。そのためには各種のストリートファニチュア相互間の関連性が大切で、会場の空間構成の上で統一的に展開し、部品、部材の互換性と標準化、製作、運搬、収納等の合理性、会場内での不確定要因に対する配置変更等にも用意に対応でき



「従」に徹したシンプルなデザイン EXPO'70



相互に関係するシステムをもったSF EXPO'70



未来の情報コアをイメージさせる案内所 EXPO'85

うる方法を得なければ成らない。としている。

まさにこの日本万国博に於けるストリートファニチュアの計画は、環境デザインの中での道具の役割を明らかにし、環境デザインの領域に工業デザイン的手法の有効性を初めて示したものである。

その後、1985年のつくば科学技術博覧会では、環境の基盤を構成するストリートファニチュアの役割に加え、ストリートファニチュアのデザイン、配置によって博覧会のテーマに沿った空間の表情を演出・表現した。又、会場構成を視覚的に分かりやすくするために、デザインと配置によってランドマーク性、記号性を表現し会場認知をしやすくしている。

1989年の横浜博覧会では、環境構成要素として従来のハードなストリートファニチュアという媒体に加え、音、光、グラフィック、フラッ



光とフラッグにより道路を演出 横浜博 1989年



先進的なゲート、照明、音楽により統合されたゲート 横浜博



軽快な表情のSF群による会場風景 EXPO'85

グ等の感性媒体、演出要素の積極的導入によって会場空間における時間的経緯による変化、場所の特性などの演出的要因が導入され新しい環境形成の考え方が提示された。

これらの博覧会業務は、西澤さんが提唱してきた道具から環境を考えることの実践として、いくつかの新しい試みがなされ、道具の視点、人の視点から環境を考えることの可能性を広げたものとして重要である。また、GK設計はこれらのプロジェクトを通じて、様々な専門家とコラボレーションすることの意味を教えられた。



光のランドマークとしても機能するゲート広場照明塔



道路のグラフィックと変化するフラッグによる演出 横浜博

西澤健の足跡

- 1936(昭和11)年 3月11日長野県生まれ
- 1954(昭和29)年 東京都立工芸高等学校卒業
- 1959(昭和34)年 東京芸術大学美術学部工芸科図案計画専攻卒業
GKインダストリアルデザイン研究所入所
- 1964(昭和39)年 ドイツウルム造形大学修了
- 1965(昭和40)年 カウフマン財団国際研究賞受賞
- 1967(昭和42)年 慶應義塾大学工学部(現理工学部)非常勤講師(～1980)
- 1974(昭和49)年 有限会社GKインダストリアルデザイン研究所を株式会社に変更
- 1979(昭和54)年 東京芸術大学美術学部環境造形デザイン非常勤講師(～1993)
『歩行者のための環境と装置』(鹿島出版会)
- 1980(昭和55)年 GK展80(Axis)開催
- 1982(昭和57)年 株式会社GK設計設立 取締役副社長就任
- 1983(昭和58)年 『ストリートファニチュア』(鹿島出版会)
- 1987(昭和62)年 財団法人日本インダストリアルデザイナー協会
理事就任(～1992)
- 1988(昭和63)年 財団法人都市づくりパブリックデザインセンター設立
理事就任
株式会社デザイン総研広島設立 取締役就任
- 1989(平成元年)年 日本インダストリアルデザイナー協会 副理事長就任(～1990)
足立区都市景観審議委員 副座長(～2003)
『URBAN ENVIRO-MEDIA GK SEKKEI』(プロセスアーキテクチュア)
GKインダストリアルデザイン研究所 GKデザイン機構に名称変更
- 1991(平成3)年 株式会社GK設計 取締役社長就任(～2000)
都市環境デザイン会議設立 代表幹事就任
株式会社GKテック 取締役社長就任(～1994)
- 1993(平成5)年 Gマーク選定審査委員 総合審査委員長
- 1996(平成8)年 株式会社GKデザイン機構 代表取締役社長就任
日本デザイン学会 副会長就任
GK展(国際デザインセンター)開催
- 1997(平成9)年 GK展(ソニービル)開催
- 1998(平成10)年 株式会社GKプランニングアンドデザイン 取締役社長就任(～2000)
Global Design 取締役就任
『GK Sekkei』(l'ARCAEDIZIONI <イタリー>)
- 2000(平成12)年 財団法人日本産業デザイン振興会 理事就任
- 2001(平成13)年 日本デザイン学会 名誉会員
GK Design International 取締役就任
- 2003(平成15)年 9月10日逝去(享年67歳)



主な委員・講師活動 財団法人都市づくりパブリックデザインセンター理事
 財団法人日本産業デザイン振興会理事
 都市景観大賞選定審査委員
 松本市都市景観賞審査委員長
 まちの活性化デザイン競技審査委員
 足立区都市景観審議会委員 副座長
 東京芸術大学 非常勤講師
 慶應義塾大学 非常勤講師
 早稲田大学芸術学校 客員教授
 宮城大学 客員教授
 愛知県立芸術大学 東京工芸大学 その他 非常勤講師



主な受賞 日本宣伝美術教会展入賞(アジア大会ポスター 1958)
 第7回毎日工業デザインコンペティション特選
 (株式会社クボタ ホームテイラー 1958)
 第16回毎日産業デザイン賞特別賞受賞
 (EXPO' 70ストリートファニチュア計画 1971)
 Gマーク部門別大賞公共空間部門(株式会社INAX アーバントイレ 1989)
 通商産業大臣・SDA大賞(新宿副都心サイン計画 1991)
 全国街路事業コンクール建設大臣賞
 (松本市宮渕新橋上金井線改良事業設計協力 1993)
 都市景観大賞景観形成事例部門賞(東京都晴海通り銀座地区設計協力 1993)
 Gマーク施設部門中小企業庁長官特別賞(舞鶴市三条通りアーケード 1996)
 土木学会景観・デザイン賞優秀賞
 (松本市宮渕新橋上金井線改良事業設計協力 2000)
 土木学会デザイン賞優秀賞(あゆみの駅周辺整備計画 2002)
 レッドドットデザイン賞<ドイツ>(ベルリン市バストップ 2003)

最近の主な計画 国際文化公園都市都市軸景観形成方針検討(住宅・都市整備公団 1994)
 川崎駅西口周辺都市景観形成地区検討調査(川崎市 1995)
 鳥栖北部丘陵新都市環境デザイン基本計画(地域振興整備公団 1995)
 大規模行為景観形成基準解説書及び公共事業等景観形成指針解説書作成
 (福島県 1998)
 都市景観形成基本計画策定(伊勢市 1999)
 沼津駅北口広場設計(沼津市 2002)

編集後記

多くの方々のお力添えを得て、「GK Report・西澤健追悼特集号」を刊行することが出来ました。ここに、ご協力・ご支援を戴きました皆様へ心より御礼申し上げます。とりわけ、ご多忙中にもかかわらず、心のこもったコメントを寄せていただきました、曾根幸一様、川上元美様、南條道昌様、曾根真佐子様、改めて感謝申し上げます。

今回の特集号をまとめる過程に、生前西澤さんがいつも語られていた言葉の幾つかをふと思い出しました。「GKグループが誇る所産は、人そのもの、そしてその人々の繋がり。」「五十年余の歴史を刻み、今日までその活動を継続出来たのも、さらに未来への展開を重ねる事が出来るのも、まずGKメンバー自身の自己研鑽と相互協力あってこそ。」「そして、そのGKグループを支えていただける方々のご協力があってこそ。」これらの言葉に導かれながら、改めてその内容を噛みしめると、GKグループの日々の営みを、改めて見つめ直すことが出来ました。そして如何に多くの方々のご協力で今までのGKの活動が実現し得たかを、その端々に読み取ることが出来ました。

人は組織を作りますが、組織もまた人を育むものがあります。様々なかたちで形成される人々の交流が、そして交歓が、GKグループ創造活動の礎となっている事実を、改めて実感して止みません。

組織的創造力を発揮し、デザイン創造に勤しむGKグループ。デザインの畑を耕し、その華と果実を取獲する。さらにその「美の遺伝子」を備えた種子を、再びデザインの畑に播くことで、デザインの循環を永遠のものとする事が出来る。それには人々が集い、知恵を共有し、力を合わせねばなりません。

西澤さんの示唆された集団創造の力強い在り方を心に抱き、今後の活動に邁進したいと思います。そして、西澤さんの残された多くの物事が、GKグループの未来への道を明るく照らし、その魂が今後の展開を暖かく見守っていただけることを願っています。

最後に、ご冥福を心よりお祈りいたします。

そして将来にわたるGKグループへの、皆様の大いなるご支援ご鞭撻をお願いいたします。

(藤本 清春)

GK Design Group

株式会社GKデザイン機構
株式会社GKインダストリアルデザイン
株式会社GK設計
株式会社GKグラフィックス
株式会社GKダイナミックス
株式会社GKテック
株式会社GK京都
株式会社デザイン総研広島
GK Design International Inc. (Los Angeles/Atlanta)
GK Design Europe bv (Amsterdam)
青島海高設計製造有限公司

GK Report No.12

2004年09月発行
発行人／小木原 光治
編集顧問／金子 修也
編集長／藤本 清春
編集部／松本 匡史
発行所／株式会社GKデザイン機構
〒171-0033 東京都豊島区高田3-30-14 山愛ビル
Tel: 03-3983-4131 Fax: 03-3985-7780
URL: <http://www.gk-design.co.jp/>
印刷所／株式会社高山